

句集

万華鏡

吉田
よし子

序

能勢の吉田よし子さんも句集を出されることになった。はじめは遠慮がちであったが、グループのみなさんが句集を出すと聞いてようやく重い腰を上げられたのである。

よし子さんとの俳縁が生まれたのは八年ほど前のことになる。おとなしくて目立つ存在ではなかったが、うちに秘めたものは熱く誰よりも熱心であった。

多趣味な作者は何にでも関心が湧くらしく、幼子のような素直な感受性と好奇心とが彼女の俳句を育んでいる。

二重丸もらへたやうな今日小春

整列は苦手と皿のさくらんぼ

太陽が笑顔に見える梅雨の晴
大根焚食べて極楽ゆけるとは
似合はなくてもあればよし夏帽子

彼女の個性が豊かににじみ出ていると思う代表的な作品を抜き出してみた。ごく自然に湧き上がった小主観を素直に写しとって成功している。じつに愉快な「よし子ワールド」なのである。

かと思うと繊細な感覚を窺わせる作品もあるので、女性的な一面も紹介しておきたい。

そば通るだけなのに萩こぼれけり
みくさ生ふ池の深さを思ひけり

最近の彼女は高齢を言い訳に吟行や句会への参加を休みがちである。確かに若い頃のように行動できないかもしれないが、俳句の世界ではそんなに早く老いてもらっては困るのである。

最近は無勢グループにも若いメンバーが増えつつある。そんな彼女たちに、よし子さんにしか詠めないメルヘン俳句の世界を伝えてほしいと切に願って序のことばとしたい。

平成三〇年六月吉日

やまだみのる

每日句會入選句

ワイパーの一拭きで足る時雨かな

飛び石は和服の歩幅菖蒲園

良寛の歌碑にあそべる巣立鳥

膝浅く予後を見舞ひし春炬燵

針供養豆腐の身にもなつてみし

万華鏡覗けば春の色いろいろ

等伯の襖絵の菊匂ふごと

曼珠沙華浄土となりし能勢路かな

子別れの木偶のしぐさに秋思憑く

子規句碑に見ゆ萩叢かき分けて

千灯のうしろは深き虫の闇

本殿へ灯の帯となる万灯会

滴れる間歩の磨崖に觀世音

香水の匂ひの残るエレベーター

湖岸の灯またたきそめし端居かな

庭池の水面に揺るる雲涼し

誰もみな小声で話す螢狩

一幅の涼し大きな鯉はねて

雨音に和して合唱雨蛙

野良猫の居眠る葺の片陰に

城跡に残る土塁や草葎

山影のしるけき峡の植田かな

つばくらめ十字切る空藍深し

花明りのこりて里山昏れなんと

みくさ生ふ池の深さを思ひけり

屋根落つる雪解雫や峽の駅

春泥に立ち往生やハイヒール

先客の影の朧や露天風呂

就活へいく子の膳に寒卵

得意札取られてくやし歌がるた

会釈してくれしマスクの汝れは誰

紅葉影磨崖弥勒のかんばせに

夕照にシルエツトなる冬木立

久闊の集ひの卓のあたたかし

新海苔の缶の封切るとき香る

一茎の野菊供花とす道祖神

ほつほつと点るは谷戸の秋灯

コンテナの山に埴頭の秋時雨

楽奏づことは至難や瓢の笛

そよぐとき秋日煌めく大櫓

秋扇打ちて語り部いま佳境

里の子ら毬栗蹴つて登校す

俎に銀一文字初秋刀魚

穂薄の活ける高さを迷ひけり

客席はざぶとん持参村芝居

赤とんぼ赤いポストを好みけり

梅雨湿りして夕刊の届きけり

万緑の里へ傾く電車かな

百選の棚田をわたる風涼し

石塊もみな仏なる木下闇

山の風通ひて機嫌扇風機

整列は苦手と皿のさくらんぼ

初鰹入荷したてと太書きす

貌いつぱい口になりたる燕の子

夕暮れて水の匂へる植田かな

大空の風に太りし鯉のぼり

万歩計記録更新花疲れ

尼寺の庫裡にいかなご煮る匂ひ

蜷の道思案の如くうろろす

手に汲めば袖口つたふ春の水

目刺焼く煙吐き出す換気扇

片手ではとてももてざる大大根

賽の目を写楽が睨む絵双六

春兆すダム湖の水の漲りて

覗きたる洞に地蔵や里の春

天日を弾くは谷戸の寒天田

仏飯の干乾びてをる冬座敷

薄氷に触るれば池の動きけり

庫裡の戸に立てかけてあり雪簞

山稜に広がりゆける初明かり

小走りに吾を追ひぬける師走人

寄せ鍋の湯気を挟んで乾杯す

紅葉山貫く高速高架かな

溪風に高舞ふもあり紅葉散る

紅葉洩る薄ら日に笑む伎芸天

どの家の柿もたわわや里日和

秋寂ぶや手漕ぎの舟の艫のリズム

天高く紙ふぶき舞ひ進水す

暮れなずむ山の奥より鹿の笛

田仕舞の煙りにむせぶ案山子翁

草じらみつけて斑鳩道めぐる

ちよつとそこまでのつもりが月の道

門閉めて夕焼とじ込む遊園地

旧道といふはあぜ道秋遍路

万緑に同化するカーブミラーかな

稲妻の一閃したるあとの闇

滴りの一滴結ぶ苔の先

妙見の翠黛しるき今朝の秋

吾を招きゐる店先の氷旗

日盛りのいましと蟬の大合唱

遊子吾も見よう見まねや盆踊

瀬の楽に和してそよげる合歓の花

打水に映ゆる老舗の石畳

敦盛の塚寧かれと青葉影

露座仏に五月雨傘をさしかけん

川風の通ふ蔵町青柳

はたたた神潜んでゐさう峯の雲

水馬真白き雲を踏んまへし

遠蛙水田は雨に烟りけり

綾なすは水のせせらぎ谿若葉

水平線真一文字に夏兆す

腕太きことが悩みや夏きたる

蘆の角縫ひて水郷巡りかな

天つ藤谷吹く風に揺れにけり

藤の花東司の窓を隠しけり

筒
抜
け
に
天
の
青
さ
や
花
万
朶

芽
柳
に
肩
の
触
れ
も
す
城
下
町

文
教
の
道
に
筆
塚
百
千
鳥

語り部のくぐもり声や春障子

茶畑の縞くつきりと山笑ふ

洗ひ堰落ちて高鳴る春の水

針箱の抽斗も開く雛調度

揺らぐ灯に雛の面の動くかと

笑ひ顔はた泣き顔か紙雛

一燭にゆらぐ秘仏の朧かな

野地蔵は雪解の音を聞きませり

半世紀炭焼守りて故郷出ず

炬燵から出るのはいやよ電話鳴る

一燭に笑まふ御仏堂寒し

切りのなき昔語りや炭焼女

木枯らしの音の間遠に救急車

頭越し飛ぶ売り声や年の市

ラジオにて第九聞ききつつ年用意

こころ許なきほど淡し冬ざくら

山寺の和尚も被る冬帽子

百万ドル夜景を透かす枯木立

古
箏
筥
黒
光
り
せ
る
冬
座
敷

朝
市
の
釣
銭
輝
の
手
よ
り
受
く

初
雪
へ
開
く
秘
仏
の
扉
か
な

使ひの子鉄砲玉や日短

枯蠅螂ふりむく顔に虚ろな目

方丈の裏に回れば石落黄なり

訪へど留守らし庭の石露黄なり

目まとひを払ひつつ読む道標

思惟仏の指先にある秋思かな

草風払ひて入る句会場

秋寂ぶや寒山十得展を出て

葛刈つて谷の奈落を見せにけり

丘に寝転びて秋空独り占め

街の灯の遠くまたたく虫の闇

森の奥よりかなかなの夕罨

露座仏の遠眼差しや翳雲

満天に散る綺羅星や台風過

新発意の声若々し盆の経

アトリエの壁に染みあり大西日

瀬がしらの白く躍りて川涼し

奥院へ險磴二百蟬しぐれ

雲ぬがぬ六甲山頂梅雨に倦む

信号の赤を真つすぐ夏燕

端居して猫に本音をきかせけり

定例句会入選句

仁王門影を正せる冬日かな

二重丸もらへたやうな今日小春

ゴーギヤンの色に染まりし庭紅葉

寄りおうて頭突きす風の葱坊主

ジョギングの歩を緩めたる花の径

昨夜の風公園中を花畳

瑕のあるチャペルの木椅子春寒し

絵硝子の堂に綾なす春日影

猪垣に人間たちの出入り口

山門を潜るやいなや菘浄土

しだれ菘もちあげて句碑誦しにけり

そば通るだけなのに菘こぼれけり

甲山こんなに風の涼しとは

太陽が笑顔に見ゆる梅雨の晴

水すまし川遡るごと進む

楠若葉して大空を占めにけり

純白のバラをも腐す雨にくし

手庇に海光まぶし梅の丘

大根焚食べて極樂ゆけるとは

香煙をうち攫ひたる涅槃西風

木守柿風に吹かれて心細

凍雲を貫かんとす摩天楼

竹爆ぜていよいよ高し吉書揚

姿よき松を映して池小春

お茶室の耳門に一步冬紅葉

神の木の枝のそよぎも秋の声

ラムネ壺桶に轟めく峠茶屋

浜に散りラジオ体操海開き

梅花藻の流れに添ひて水涼し

茶室窓昼なほ暗き緑雨かな

あたたかや撫牛なでて吉願ふ

紅梅の一枝挿されし吉野窓

愛のチヨコ八十路の夢を膨らます

なで肩をずり落ちさうや春シヨール

印刻の残る巨岩や鴟高音

風吹けば葉隠れに見ゆ葛の花

うち仰ぐ樹齡千年蟬しぐれ

つつついでみたき誘惑蟻地獄

灯点せば水瓜提灯大笑ひ

凌霄花分けて表札確かむる

翁の句吊るす風鈴良く鳴りぬ

畦をゆく貴婦人は誰白日傘

簾越し奥の生活の見えにけり

梅雨じめりして刻告ぐる古時計

妙見山の谷戸を埋めし栗の花

囀りて森のしづけさそこなはず

水餅のおちついてゐる甕の中

店あかり映るしぐれの石畳

枯蓮相討つごとく凭れあひ

ガラス窓涙走りす秋の雨

蔦若葉われもわれもと伸びにけり

覗き見る我は映らぬ
雛鏡

園児らの頬みなまつ赤とんど燃ゆ

天日を遮る雲に山眠る

ベートーベン聞きてやる気の年用意

九体仏温顔並ぶ冬日和

山風に搬ばれてきし落葉掃く

脚だけがみゆる梯子は松手入

句帳手に持つてゐるだけ紅葉狩

杭一本長き水尾ひく秋の川

出
か
け
ね
ば
損
し
た
思
ひ
秋
の
晴

青
田
風
切
つ
て
走
り
ぬ
一
両
車

地
に
頬
を
つ
け
て
あ
ぢ
さ
る
雨
に
伏
す

山門の高きをめぐす山の蝶

梅雨濁りして大淀の激ちけり

螢火のかくも幽けき潦

近道といふは急坂桐の花

山峡の木の間隠れに山つつじ

翻りては日を返す風若葉

うち仰ぐしだれ桜の大傘を

溪からの風梅が香を吹き上げ来

すぐ下に電車の走る梅の丘

寒の水浴びて常ぬれ苔不動

冬木の芽いのち包みてふくらみぬ

津の国の水誇りとす寒造

大桶の箍ゆるみなし寒造

柿の実の落ちて散らばる獺祭忌

職辞してよりの晩学秋灯し

閉店を告ぐる貼り紙秋の風

頬なずる風まぎれなく涼新た

俎の刻む手をとめ初音聞く

遠山を屏風に野焼き煙たつ

落葉してのつぺらぼうの大櫓

鉄棒の子にさかさまや雲の峰

天平の薰風通ふ朱雀門

鬼よりも女が強し壬生狂言

家族みな庭にでてをり春炬燵

霜柱地球を少しもちあげし

小雪ふる美容室客吾一人

しぶしぶと炬燵から出る電話口

吟行句会入選句

秋惜しむ母校の壁の傷跡に

水鏡して開きたる蓮大輪

観音の遠まなざしに春霞

花の寺堂縁借りてお弁当

おほかたは天を向きたる落椿

裏を見て懸崖菊をうべなひぬ

日傘相かたむけ会釈交しけり

五月闇古墳は巨石鎧ひけり

似合はなくてもあればよし夏帽子

乙訓の水が育てし牡丹かな

水亭や少し開かれ春障子

峡の日を空に散らして照紅葉

庭石の音なく濡れて時雨けり

石仏に日傘さしかけ吟行子

力石試す人なく灼けにけり

蟻登る国宝門の太柱

薰風や大三門の大薨

新緑の雨に全開江口堂

浜長閑干されしままの漁網かな

つちふるや海と空とのけじめなく

鳥帰る彼の地平和であるやうに

紅さしてふくらむものの芽のありぬ

菊炭の窯を守りて半世紀

春泥に靴底重くなりけり

緋座布団づれしをなほす座り雛

艶めける女人ばかりの雛の宿

庭石に笑ひころげて土雛

青嵐塔の九輪の傾ぐかと

梅雨の雲切れて主峰の現れにけり

万緑の山また山や奥吉野

足元の心もとなし螢追ふ

小流れに星とちらばる草螢

万緑をまたぐ吊橋揺れやまず

流木の岩に抱きつく出水川

満目の青葉に埋まる義士の墓

噴水の吹き上ぐるたび天仰ぐ

坑道を出て目つぶしの新樹光

鉾毒の川といへども澄めりけり

辻一つ入れば下町おでん街

枯蓮の影のゆらぎや水鏡

小春日の障子にうつる深庇

寝惜しむ明日香の宿の虫浄土

遠山に雲棚びきて朝涼し

滴れる磨崖観音地獄谷

あとがき

早いもので俳句をはじめから十六年が経ちました。遅々とした歩みながらも地域のよき仲間にも恵まれ吟行に句会にグルメにと楽しい俳句ライフを満喫しています。

自分の句集を作ることなど夢にも考えませんでした。句友のみなさまの応援を得て実現することができました。有り難いことだとうれしく思っております。

句集に収めた作品は、すべてウエブサイト『ゴスペル俳句』の吟行や句会で授かったものです。ご指導いただいた、やまだみのるさんとの不思議なご縁に感謝するとともに身に余る序文まで賜り心からお礼申し上げます。加齢とともについ億劫になりがちですがお言葉どおり第二句集を目標に励んで行きたたく存じます。

最後になりましたが、句集作成にあたり何かと助言や励ましをいただいた能勢の句友の皆さまにも厚くお礼申し上げます。

平成三〇年六月吉日

吉田 よし子

『万華鏡』 吉田よし子句集

平成三〇年七月一五日 印刷

平成三〇年七月一五日 発行